

第5回文化芸術によるまちづくり座談会 議事要旨

日時	2015年2月16日(月) 午後1時～3時30分
場所	町田市役所2階 市民協働おうえんルーム
出席者	座長 市川宏雄氏(町田市未来づくり研究所所長 明治大学教授) 副座長 片山泰輔氏(静岡文化芸術大学教授) 委員 伊藤せい子氏(サントリー・パブリシティ・サービス株式会社) 委員 西茂弘氏(株式会社オン・ザ・ライン代表) 委員 美山良夫氏(慶應義塾大学教授) 町田市長 石阪丈一 町田市副市長 高橋豊 町田市副市長 有金浩一
資料	第5回文化芸術によるまちづくり座談会(スライド)

議事

1. 議題:過去の座談会のふり返り

事務局が第1回から第4回までの座談会の報告ならびに委員による意見をふり返った。

委員:第4回をふり返って意見を述べたい。観客動員型戦略と市民活動支援型戦略は、町田市ならびに周辺地域に多くの住民がいることが前提になる。一方、芸術創造・発信型戦略は、町田市に住む人を増やすために文化芸術を活用しようとするものだ。まちの発展を前提としてホールを考えるか、ホールと文化芸術を将来構想の鍵として位置づけるかの違いだが、後者はより覚悟のいることだろう。

委員:ホールの方向性や主たる領域が明確になっていない。これまで都市の魅力発信をテーマにシンボルについて議論がなされたが、何があれば今後の都市間競争において優位に立てるのか。町田市はポテンシャルがあるので、うまくつなげていくことが大切だ。

委員:10～15年後に求められる成果を想定し、ホールのあるべき姿を検討する必要がある。現在とはまったく異なる時代に突入することを前提として考えるべきでしょう。何でもやりたいということでは失敗する。決断が必要だろう。

委員:何のために、だれのためにホールをつくるのか。長期的な視野に立って、ソフト・ハードの両面でどのようなシンボルをつくるのか。市民団体重視か、経済重視かも考える必要がある。4回の議論を踏まえると、市民団体か経済重視かの方向性が決まりさえすれば、ホールの規模や立地などは自ずと決まってくるのではないか。

有金副市長:自分としては、既存のホールで市民活動支援型を追求する。その上で、市外からの来街者を増やしたいのであれば観客動員型戦略もありえるだろう。芸術創造・発信型戦略は、外から人材を連れてくるよりも、市民団体を支援するなかでコンテンツを育てていくことができるよ。

高橋副市長:高齢化のなかで、町田市に住んでもらう、来てもらう対象を明確にするということが大事だと感じた。「町田市に住みたい」と思ってもらうためのイメージ戦略のひとつとしてホールが位置づけられるのではないか。まちに来てもらうための装置としてのホールと考えるな

ら、経済重視がよいとは思いますが、行政である以上は市民活動も無視できないだろう。

石阪市長:ホールがあることで、周辺地域、横浜、さらには首都圏の人たちに町田市に親密感を持ってもらうことが大事だろう。そのための施策のひとつとして文化芸術があるのではないか。観客動員型戦略が望ましいのだろうが、お金を稼ぐという目的以上に、町田市との距離を縮めてもらうための戦略ととらえるのだろう。

委員:20年後の2030年には経済成長が維持できなくなり、東京圏も人口減少が危惧される。その時代に向けて、これから15年間で準備しておく必要があるが、価値観を先取りする必要がある。そのひとつはコミュニティになるだろう。行政がすべてを提供する時代は終わった。市民やコミュニティが牽引し、それを支援するのが行政だととらえるべきだ。

「これが町田だ」というものが見当たらないのだが、だとするとホールをつくる目的は、シンボルをつくることだろう。財政状況は厳しいが、20年後を見据えて生き残る都市になるための方策を打たなければならない。

第3回の座談会で発言のあった、文化と芸術の違いも検討する方がよいのではないか。

委員:市民活動支援型戦略を芸術創造・発信型に発展させることは容易ではない。観客動員型戦略については、2,500席規模のホールであれば可能性があると思う。ただし、人口減少を踏まえると、都心の人を呼ぶのは難しいのではないか。町田市以西の地域から集客して、郊外の拠点を目指すという都市戦略になるだろう。

委員:第4回では、都心からも人が呼べるという意見が出た。首都圏はマーケットがあるので興行主催者側は都内および近郊の会場を欲しているという状況があるので、町田に大きなホールをつくれれば、都内におけるホールコンサートの主要会場になりえるという趣旨だった。これは、直接的な市民サービスでないかもしれないが、来街者が増えれば、結果的に市民のためになるという考え方になるのではないか。

委員:町田市に2,500席規模のホールがあれば集客が見込めるという意見は、マーケティング的な根拠がある。神奈川県のホテルの動員力が強くない。神奈川県は大きな人口を有しているにもかかわらず、適正な規模、利便性を持ったホールがない。そのなかで、多くの人が行き来する町田市は、大きなホールさえあれば、コンテンツも人も呼び込むことができると考えられる。

2. 議題:基本構想に向けた検討

事務局が、過去4回の座談会での議論を踏まえ、文化芸術によるまちづくりを進める上での検討ポイントや必要な作業について説明した。

委員:目的として、文化芸術以外の政策領域への貢献を果たそうとするなら、3つの戦略には収まらない、教育普及やアウトリーチのようなプログラムも検討するべきだろう。

委員:「文化芸術」という言葉が議論を狭めているのではないか。この地域や2035年という時代を見据えて、どう生きていくのかという根本を考えないといけない。交通のハブという町田市の強みをさらに強化するためのホールのあり方を検討するべきだろう。「文化芸術」ではなく、まちづくりという文脈で考える方が将来のイメージが明快になるのではないか。

石阪市長:交通のハブとしての特性を強化するというビジョンのなかにホールを位置づけるという考え方なのだと理解した。町田市の強みを活かすハード・ソフトが求められるのだろう。

委員:江戸川区のホールは1,500席だが、海外から公演に訪れる方がいる。10~15年後、町田市は日本国籍の住民は減るかもしれないが、外国人居住者はどうか。外国人居住者を

含めたにぎわいを生むには音楽というコンテンツは向いている。文化芸術とは趣を異にするかもしれないが、多くの人が集い、にぎわいが発生し、何らかのパワーが生まれることも重要なのではないか。

委員：報告で示された目的だが、具体的すぎるのではないか。これからの時代におけるホールの役割を示さないといけない。その前段があって、はじめて具体的な話ができるはずだ。

委員：前段と具体的な話を埋めるためには、何があれば町田市はこれからもハブであり続けられるのかを考えてはどうか。交通のハブである上に、文化や芸術が重層的に存在することで、ハブの機能が強化されるというイメージを持ち、ホールやほかの施策で実現するという構造を持って検討すると方向性が見出せるのではないか。

委員：今後はホールをつくる理由を聞かれることが多くなるので、町田市にホールをつくる論理を固める必要がある。「つくっておしまい」のホールではない論理でなければ、税金の無駄遣いというワンパターンの議論になる。

高橋副市長：町田市にとっては、住んでもらいたいという思いと、中心市街地に訪れて活動してもらいたいという思いがある。交通結節点である町田市において、住んでもらう・来てもらうための政策提案のひとつがホールなのだと思う。高齢化社会にあって町田市の人口を極力減らすことなく、税収を確保するための戦略をとることが必要なのだろう。

委員：よいホールをつくることで地域にビジネス・産業が興るとい事例はあるのか。

委員：創造都市では、文化芸術に携わる人が集うことで、その人たちの創造性が、ほかの領域の創造性に影響を与えることで知的労働をする人の集積をもたらすと考えている。重要なのは何か創造されることであり、その活動がクリエイティブ産業に影響を与え、知的な仕事を生み出すというストーリーです。

委員：そのストーリーをどこまで取り入れるかは議論するべきだろう。ただ、取り入れるのであれば、ホールをつくりながら、何らかの仕掛けを講じる必要がある。

石阪市長：町田には、ここからどこかに行こうというターミナルとなる場所がない。移動への動機づけとなるものがハブのひとつなのではないか。

委員：来年度は基本構想を策定されると思うが、まちづくり全体で考え、ホールのあり方を考えることが求められる。ホールの検討・建設のスケジュールはどのように考えているのか。

石阪市長：町田市新5ヵ年計画では、2016年には設置場所を決め、基本構想を策定すると書いている。

委員：場所が具体的になれば、目的や方向性も絞られてくるだろう。

委員：最初に現実的にできること・できないことを整理する必要があるだろう。20年後の町田市の将来像を想定し、ホールの機能を考えるべきだ。そして、現時点で検討したことが市長が変わっても継承されるように、たとえば条例などで明文化しておく必要もあるだろう。

委員：交通のハブというが、町田市民はどのようにとらえているのか。

高橋副市長：住民の生活スタイルやまちのとらえ方は、明治時代以降の横浜線と小田急線が交差して形成された町田だと思う。それを踏まえると、横浜線と町田市以西の小田急線の沿線住民はつかまえておかないと、町田市の価値がなくなってしまう。

委員：今後のまちづくりは市民が率先して取り組む必要があるが、そういう土壌はあるのか。

高橋副市長：町田市民は町田のことが好きで、まちをどうにかしたいと思う人が多い。市民参画の土壌はある。

委員：まちが好きという感情は大変重要であり、それを施策推進につなげられるかが鍵だと思う。

3. まとめ

各委員からまとめの一言をいただいた。

委員：人が集い、にぎわいが創出されることは多方面に影響がある。だれが集い、どのようなにぎわいとなるかを想定し、そのためのホールのあり方を検討してもらいたい。また行政には、つくるだけでなく、その目的や活動内容などのプレゼンテーションも行ってもらいたい。

委員：ホールを使ってどのような政策を展開するのかという長期的展望が重要だと思う。ホールを使ってどういうまちづくりをしていきたいのかを考えることが必要ですが、その方針を決めたら左右されないことも必要でしょう。

委員：何のために、誰のためにつくるのかを考える必要がある。市民団体のためなのか、経済活性化のためなのか。中途半端なものをつくっても、よい結果にはならない。また必ずしもホールをつくるのが結論なのかも考えた方がいい。

委員：文化と芸術の違いについて述べる。文化と芸術は、領域ではなく、活動という観点から考えるべきだ。合唱や市民オーケストラは芸術ジャンルの文化活動であって、芸術活動ではない。芸術活動とはもっと創造的な活動だ。文化活動と芸術活動を混同せず、それぞれが都市にもたらすものを把握した上で検討しなければいけない。

有金副市長：町田駅前が魅力的だが、更新の時期を迎えている。中心市街地再開発・再整備とホールを関連づけて、今後2年間で検討していきたい。

高橋副市長：15～20年後を想定することが大事だと感じた。まちづくりは困難が予想されるが、エネルギーを貯めて取り組んでいきたい。

石阪市長：ホールがまちをつくりかえるエネルギーになると確信している。商業的な狙いや老朽化に伴う建て替え等の理由ではなく、まちづくりのなかでとらえて、基本構想の検討を行ってきたい。

以上